

日蓮の用いた勘文（かんもん）の義について

岩 佐 貫 三

日蓮が鎌倉を中心として活躍した時代は、宛かも前後二百年に亙る京都中心の摂関政治の衰退により政治の舞台も大きく移り変わり、新しく鎌倉を中心とした武士政権の確立しつつあつた時代である。又、従来の貴族社会を対象とした摂関陰陽道もやがてその本拠を関東陰陽道の体制下に移行しつつあつた時代でもある。即ち賀・安兩家を総本家とする陰陽道家も幕府の御用陰陽師集団としての形態に生れ変わり、一般陰陽道の世界もそれに比重が傾きつつあつたのである。当時、一般の指導的日本人が前代の王朝以来の伝統とこれを否定しようとしても否定し切れない惰性的な思考のさ中にあつて所謂新興勢力である関東武士の間にさえも、京都人の模倣にとめる結果易卜・物忌み等の思考なり、呪術思想なり、幼稚な呪術信仰なりがいつのまにか幕府政権下に再現され、王朝時代よりしのび込んだ陰陽思想の承継としてこれらが幕政下の一般教養人なり、関東庶民なりの間にも滲透しつつあつたのである。この事は今更乍ら吾妻鑑・九条兼実日記その他の

公卿日記等をあげる迄もない。又、この現象は例えば表題の日蓮の場合も例外でなかつたと云えよう。端的に言つて鎌倉幕府御用陰陽師グループと日蓮との接近という事実もあながち考えられない事ではない。（能登・妙成寺断簡遺文等参照）或は日蓮の用いた太歳紀年法等よりみても日蓮の思考形式なり、思想形態なりの片隅にもその教養の一端として陰陽道思想の片鱗をみ出すことができる。ここで私は既成の宗門的な勘文を介入することなく一般的な客観的な立場で日蓮の用いた勘文思想の原点を私なりに解明してみたい。周知の如く古来より陰陽道家なり、明経道・明法道・天文道・暦道・くすし道等の諸家によつて専門的な用語として使用されきたつた勘文とは元々ある文証によつて天文現象なり、自然現象なりの故実来由を勘考し、その及ぼす未来相を予想し、予言してその結論を上奏するという上奏文的使命をも含む独特の意義をもつものである。特に陰陽家によつて例えば中原家の諸道勘文の例にみられる如く後世は革命勘文・革命勘文等の意に

も用いられたのまにか未来を察知するという図讖的・識緯の意味をもつて発展したものである。

その形式は「勘申……事」から始まり、「謹以勘申如件 何月何某」とか「仍勘申……年月日何某」とか「仍言上如件 何某」等のむすびを以て終る一連の官公的表啓文である。即ちかつての平安朝の太政官外記なり、内史(記)が、専らこれに当つたという勘文文書の形式から脱却して日蓮の用いた独特の勘文は立正安国論として完成されるのであるが、いずれにしても陰陽道の側面からみても、立正安国論は一つのすぐれた典型的な勘文として考えねばならぬし、この勘文の性格を除いては立正安国論を考えることはできない。尤も日蓮の用いる勘文といふことばの意義は広義の場合と狭義の場合の両様が考えられる。前者の場合からは私はむしろ日蓮の陰陽道の教養の一端を察知するし、後者の狭義の場合は太歳の紀年法の採用なり、七難の予言的思考なり、宿旺道の思考等なりから立正安国論そのものを日蓮の一つの代表的勘文として考えたいのである。尤も「勘文」と「論」との矛盾も考えられる。(明徐師曾撰文体明弁参照)以後安国論関係の日蓮遺文を中心とし、その成立の前後次第から考えてみよう。勿論、その由つて来たる因は天変地異が発端であり、この時代の数々の地変天異があげられるが、まず正嘉の大地震のことをあげねばならぬ。日蓮の爾後継続する対国家運動なり、本

地開顕の生涯を通じての安国論上奏はその口火であり、前哨戦でもある。安国論御勘由来・顕立正意抄・下山御消息・宿屋入道許御状・中興入道消息・清澄寺大衆中・法蓮抄・呵責謗法滅罪鈔等を通じてみられる正嘉の地震の被害の甚大さについては吾妻鑑四十九巻の正嘉元年八月廿三日の項に記録されて詳しい。

乙巳。晴。戊尅大地震。有音。神社仏閣一字而無全。山岳頽崩。人屋顛倒。築地皆悉破損。所々地裂。水涌出。中下馬橋辺地裂破。自其中。火炎燃出。色青云々

文応元年(一二六〇年)七月、献進の立正安国論要本(中山格護本)なり、八年後の文永五年正月の法鑿坊平盛時宛の御勘由来なり、翌文永六年十二月に添加された奥書(尤も身延會存本には文永五年時宗宛の副状がある)の時代考証より、すすんでは建治元年の再治本といわれる本圀寺蔵の所謂広本に到る変遷はあつたとしても、又その書誌学的研究の結論は今尚、その結論を出されていないとしても、日蓮にあつて勘文的性格の潜在は否定できない。現存の遺文中、勘文の語を使用されるもの十二ヶ書(御勘由来⑧ 宿屋入道許御状① 安国論奥書① 法門可被申様事① 金吾殿御返事① 佐渡御書① 富士殿御返事① 及び三世諸仏總勘文教相廃立① 安国論副状① 昭和定本遺文秩文① 計⑩。数字は使用度数)を数えられるがこれらの諸遺文を通じてみられることはすべてこれ安国論に始まり、安国論

日蓮の用いた勘文（かんもん）の義について（岩佐）

に終るといふ勘文の意である。

造_二作勘文_一、其名号_三立正安国論_一（御勘由来）（昭定遺42頁）

相叶_三日蓮勘文_二云々（御勘由来）（昭定遺43頁）

勘文一通撰_レ之（宿屋入道許御状）（昭定遺44頁）

既勘文叶_レ之（奥書）（昭定遺44頁）

勘文もてこれをつげ知らしむ（法門可被申様之事）（昭定遺45頁）

等の用例の如く日蓮の場合の勘文のすべては安国論の意でなければならぬ。只、僅かに佐渡御書の外典鈔、文句二、玄四本末、勘文、宣旨等（昭定遺61頁）の一般的意味と富木殿御返事の定如_三勘文_二候べきか（昭定遺48頁）なり、三世諸仏總勘文教相廢立の勘文シテ給ヒテ曰ハク（昭定遺168頁）等の動詞的用法等の例外があるにすぎない。誠に進献本に最も近いと伝えられる玉沢妙法華寺本の日興師書写本の安国論冒頭の天台沙門日蓮勘_レ之の義こそ日蓮の用いた勘文の意でなければならぬ。尚、日蓮の用いた「勘ふ」の語義について序乍ら一見してみるに現存遺文中、摘出されるもの約九ヶ書（安国論奥書③ 顯立正意抄① 下山御消息① 中興入道消息① 清澄大衆中① 呵責謗法滅罪鈔① 本尊問答鈔①。数字は使用度数）である。かくの如くこの勘文の義は天災地変について之を経文に照らし勘考して自己の所懐を述べ更に未来を予議する意味に解すべきかと思う。こゝで更にすすんで日蓮と謙倉幕府御用陰陽師グループとの交りについて考えたい。一体、安国論奥

書に自署している文応元年の太歳庚申の年紀法と文永元年太歳甲子の年紀法とともに注目すべきは甲子革命の思想の暗示である。即ち……既に勘文之に叶う。之に準じて之を思うに未来亦然るべきか、此の書は微ある文なり。是れ偏へに日蓮の力に非ず、法華經の直文、感応の致す所か（昭定遺43頁）と述べるにあたり、彼自身は、この未来予見の思考を、未来への勘文の洞察力なり、神力なりを一切あげて法華經の感応のいたすところと明言しておるのは当然のことであろう。勿論この時代の勘文の意が、吾妻鑑の第四十九・文応元年三月等にみられる如く、大地震・大天災等に対する陰陽道輩の上司に上奏する勘文であろうからこの時代通念を日蓮も勿論、万々諒承しての上の勘文起草でなければならぬ筈である。それにしても所謂、術数家という太歳（木星を以て人君の象とし、諸神を統卒し、方位を正し時序を幹運し、歳功をすべる）という太歳を紀年に用いる日蓮の思考の中に、私は彼の陰陽道の教養の一端を無視するわけにはゆかぬのである。更に日蓮の図讖的思考を推しすすめてゆくならば当然安国論所引文証の二大經典たる薬師經の七難の一つ星宿変怪の難なり、仁王經七難の一つたる星宿失度難なりの宿旺道思想を日蓮に於ても無視することはできないことである。この問題については派生するところが大きいので別の機会で述べてみたい。それにしても薬師經なり、仁王經なりの七難の星宿の難

と宿旺経の関係を類推して日蓮の思考の一隅に図識思想なり、密教思想なりが潜在すると解することは一の飛躍的論題であらうか。これについては更に彼の叡山修学時代の教養内容なり、京師遊学中の陰陽道師家との交りとか、例の安国論のゴースト・ライター的人物「大学三郎」との在京中のつながり等が究明されねばならぬし、これには私は高橋智遍氏や、故鈴木一成氏の見解とは少々ことなつたものをもっているがここには紙数の関係上ふれぬこととする。只彼の宿旺道の思考と真言析との間などの矛盾という微妙な問題が介在する。又、安国論の草稿ともいへべき守護国家論との関係についてもふれなければならぬ。正元元年（一二五九年）著作の守護国家論は日蓮三十八才の時の述作であり、安国論草稿の一つとして考へるべきであろうが、これには勘文的形式なり、その色彩はみられない。考へようによつては守護国家論執筆当時から更に文応元年（一二六〇年）要本稿了の際における時代的推移のきびしさと自然変異の苛烈さに益々その信念を確固不拔のものとして行つた過程もうかがわれるし、この間に日蓮の勘文の思考が強烈となつたものとも考へられよう。日蓮の予言し勘文した他国侵逼難は如実に表われては蒙古によつて日本は蹂躪¹、んされることを確信し、王法必滅の時ですえ、仏法は存し得るといふ確信は、こゝに來つて単なる陰陽道の勘文の意を揚棄して、その昇華した姿を絶対的真理

日蓮の用いた勘文（かんもん）の義について（岩 佐）

の仏法としての法華経に見出したわけである。従て日蓮の云う国家は法華経支配の王孫の確立される国家をいみすることにもなり、国家鎮護の爲の勘文作製（安国論執筆の義）となつて具体的にはあらわれたのである。しかしその勘文の究極的現証は客観的に考へて必ずしも事実とは合致しなかつたし、日蓮の考へた他国侵逼難は国民の血を以て贖われたとは云え、最終的には平和を將來し、文永・弘安兩役も終局の時点に立て考へれば元軍の敗退という歴史的事実を以て了り、これ亦必ずしも日蓮の考へた勘文現証を將來したとは言いがたい。特に文永の結果については日蓮も身延山中にて諒承の筈である。この辺に護教的既成日蓮門の宗義をはなれて謙虚に判読すべき史実もあるようである。只、日蓮にあつては、その教養の一端としての陰陽道の意識さえも、時にはこれを昇華し、やきつくし去つて新なる日蓮的勘文の意を創造し、そのイメージのもとに他の同時代の宗祖にはみられなかつた典型的な中世的思考の一つのタイプをつくり上げたことだけは否定できない。

1 妙成寺誌刊行会桜井甚一編「年表妙成寺誌」16頁口絵真蹟参照。

2 文体明辯・卷43参照。

（引用文省略）